

派遣者番号	29J02	氏名	藤村 由紀子
研究主題 —副主題—	書くことの授業における協働の可能性に関する一考察		
派遣先	東京学芸大学 大学院	担当教官	細川 太輔
所属	江東区立豊洲小学校	所属長	植木 清隆

キーワード：書くこと 協同 対話 他者

1 研究の背景 (目的)・主題設定の理由等

授業中、児童が自らの学びを構築するとき、そこには対話がある。「児童と教師」はもちろんのこと、「児童と児童」、「児童と書かれたもの」の間に交わされる言葉をとおして、書き手である児童は思考を巡らせる。いわば、教室は様々な状況下で、言葉を介した学習の共同体と言える。情報化社会となった現代においては、構成主義的な教育理論の導入が不可欠と言われている。その最も基本的な例として、アクティブラーニングが挙げられる。教師による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な参加を取り入れた教授・学習法として協働的な学習指導が推進されている。

では、教室で展開される書くことの授業において、児童と児童の対話を生かした協働的な学習に関して、どのような研究がなされてきたのだろうか。また、そうした研究により、どのような児童の姿が捉えられたのであろうか。

新学習指導要領で提示された授業改善の視点において、「主体的な学び」、「深い学び」とともに、「対話的な学び」の視点が提示された。書くことの授業における、対話を生かした協働的な学習の可能性の検討を新たに行うことは、これからの予測不可能で多様な社会を生きる子供たちにとって欠かせないことであると考え。そこで、本研究では構成主義的教育理論の立場から学校教育における書くことの意義及び協働的な交流学习が与える影響について、近年の先行研究を整理・概観する。その上で、協働的に書くことの学習により児童の認識変容は起こりえるのかについて、実践検証をとおして明らかにする。

2 研究の内容・研究の方法

本研究では、文献を対象とした理論の史的な研究と、検証授業を基にした実践研究の双方から考察した。文献研究の理論に基づいた知見を実践の検証へ往還させ、妥当性を担保することとした。

久保田 (2000) は、学習者の理解の仕方に焦点を当てている構成主義的教育理論が、情報社会となった現代に対応していると、次のように論じている。「知識は人間の個人的な体験、属する文化などと切り離すことはできないため、各人それぞれ、世界を違った形で理解すると考えられている (Johnson, 1987)。学習者がどのように主体的に意欲をもって学習活動に関わっていくかというところに焦点が当てられている。」そして、「(1) 学習とは学習者自身が知識を構築していく過程である」、「(2) 知識は状況に依存している」、「(3) 学習は共同体の中での相互作用を通じておこなわれる」としている。このことは、教育実践においてしばしば言われる、自発性や自主性を重んじるという点に類似していると捉える。しかしそれだけではなく、ピアジェ (Piaget, 1973) が言うように、子供はまずは自分の理解できている水準の理解を持ち出して活動を展開しようとし、他者を含む周りの環境との関わりをとおして新しい理解をそれまでの理解の上に積み重ねるということの意味していると考え。

しかし、大内 (2001) が言うように、「書くことは、文字通り個別で孤独な作業に終始し、学級という集団の場に最も意義深い (集団思考) という営みが、作文指導においてだけは当然のことであるように放棄されてしまっている」と言える。茂呂 (1988) は、「人間は書くことによって場を作り出そうとする存在であり、対話過程の中で、場の意味を産み出して行く存在である」ことを指摘している。そして、「文章は対話の過程において構成されるもの」としている。

以上の考えに基づき、書くこと及びその能力を、個人に閉じたものとせず、他の言語活動のように人

が置かれた状況の中や、そこに生起する対話を含めた「関係性」にあるものと捉える。

そこで、まず、児童の書くことへの認識を明らかにし、次に、協働的に書くことの学習において児童の認識変容やその過程を、思考や認知の側面から考察する。

本研究の検証は、東京都内公立小学校の協力を得て、以下のとおり進めた。

- (1) 昨年度実施した予備調査を基に、児童の書くことに関する認識の分析
- (2) 従来の書くことの指導についての史的調査
- (3) それらを踏まえ、文章を書くことの過程で、対話が生起するような文章の選定と環境設定をし、それを基に構想した単元で検証授業の実施

対象学級：東京都公立小学校第6学年

担任による授業

「世界に一つ！オリジナル文集をつくらう」

① 1次（1時間）

ア 単元に関する情報共有

相手：学級の友達

目的：2年間で最も心に残っている、この学級での思い出を書く（文集づくり）

イ 既習事項の振り返り、学習計画

② 2次（7時間）

ア 題材検討・決定

イ 題材についての経験を振り返る

ウ 取材した情報の整理、構成、記述、推敲

- (4) 書くことに関する児童の認識変容の分析

予備調査では、授業前と後のアンケート結果にKJ法を用いて分析し、児童の書くことに関する認識を抽出した。参与観察、作品分析や授業後のインタビューを参考に加えた。検証授業では、単元前と後のアンケートなどから抽出児童を決め、毎時間の参与観察、動画撮影、授業後のインタビューを発話プロトコルに起こし、エスノグラフィーの手法を用いて分析した。

3 研究の結果

研究結果として、二点挙げられる。第一には、児童の書くことに関する認識は、他者との対話をとおして変容するということである。第二には、そうした児童の認識変容は、学習環境及び、指導者の適切な発言が影響を与える可能性があるということである。

4 研究の考察

予備調査の結果から、児童の書くことには、[独力ー協働]軸と[効率的ー質の向上]軸の二軸が特徴として見られると考えた。この特徴を指針とした本調査での児童の認知を分類すると、[独力が効率的]、[独力だが必要に応じて相談]、[協働の方が効率的]、[協働だと質が向上]の、4タイプのカテゴリーで捉えることができるとの考えを導き出した。

この分析と検討から、児童の書くことには、既習の知識や協働の経験が大きく関与していること、また、言語活動の変容により、独力の場合よりも協働した場面での文章生成が効果的であるという実感を伴った経験が影響すると考えた。個の表現による言語活動と捉えられがちな書くことも、他者との協同の中で生成される思考の過程にある表現と捉える提案は意義あるものとの確認ができた。学習のめあてや活動形態の在り方、授業の展開など、指導者と相談しながら調査を進めたことで、書くことに関する児童のメタ認知と協働の関連性及びその特徴を抽出することができた。

今後の課題は、児童が協働的に書くことに、効率などの有効性を感じて変容が見られた場合、どのような影響によりそのような変容が起きたかを検証することである。

5 今後の展望

ここまで述べたように、書くことにおける協働と対話に着目して、単元を構想し評価や指導に当たることは、児童の思考に即しその認知を促す学びにつながる。

今後の展望としては、協働や対話を重視した単元や授業をとおして、その効果や児童への影響を検証することである。その結果に基づき、様々な教室で広く実践できるような具体的方策をまとめ、模範授業等で提案していく。